

読書のすすめ

文庫本のこと

外山滋比古

目は本を読むためについているのか、ということを考えることもある。あまり、世間で本だ、読書だと目の色を変えるから、本を読んでバカになったのではないかという人間の顔を思い浮かべて、ひとりニヤリニヤリしながら、ぼんやり時を過ごす。要するに、読書がそれほど好きではないのだ。人に読書をすすめる資格はない。

いつも読書の腹加減はすいている。げーとするほど本をつめこんではない。気に入ったものがあれば、じつにおいしく読む。ほかの本など相手にしないで、そればかりつき合つて、はなはだ心ゆく思いをする。

あとの腹具合を考えてみるに、古典と言われるようなものがさすがにいちばんもちがよい。ベストセラーはあとで妙なゲップが出たりする。

古典といつても別に大きさに考えることはない。当世はどこにも安本でころがっている。夜の散歩に、小銭ぜにをもってふらりと町へ出て、本屋へ入れば、ずらりと文庫本がならんでいる。バカな書店が文庫本を商売の仇にして虐待したこともあるが、このごろは売行きがよいから、どこでも一等席に並んでいる。これすな

わち、一大古典双書である。かけそばいっぱい値段でりつぱな古典をポケットに入れて帰ることができる。生けるしるしあり……。

文庫本で注意したいのは翻訳もので、これは店頭で何ページかはかならず本文を読んでみる。日本語でない日本語で訳してあるものが、まあ、さういうものなら、読まない方がどれほど身のためか知れない。翻訳の古典は数えるほどしかない。

ことは、新しく文庫に進出する出版社もあって、文庫競争になるという。競争がはげしくなれば読者へのサービスの悪くなることはない。見どりよりどり文庫本を読む時代が来たようだ。

(お茶の水女子大学)